

菅原山天満寺宝珠院の縁起について

藤巻和宏

はじめに

大阪市北区に所在する菅原山天満寺宝珠院（真言宗御室派）は、応永三年（一三九六）二月朔日付の権中納言雅□^{（註）}の寄進状にその名が見え、また、平安末期〜鎌倉期の作と推定される仏像が複数伝存することから、すでに中世には存在していたことになる。しかし、寄進状の真贋や、仏像の年代判定および伝来経緯についてはより慎重であるべきであり、確実なことは不明とせざるを得ない。

一方で、近世に記された当寺の縁起には、空海（七七四〜八三五）による創建や菅原道真（八四五〜九〇三）との関係等が記されている。同時代資料による裏付けは取れず、現時点ではあくまで縁起の中の設定と見ておくほかはないが、史実か否かが問題ではなく、このような内容が実際に語られ、そしてそれが信仰を紡いでいったことは疑いない。

本稿では、近世に記された複数の縁起の紹介を通し、当時の信仰の様相をうかがう一助としたい。

既公刊縁起

大阪市教育委員会『大阪市内所在の仏像・仏画 宝珠院の仏像について』（『大阪市文化財総合調査報告書』二三、二〇〇〇）において、当寺の縁起のうち、『撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起』（近世末期・木版墨刷）が紹介されている。しかし、書誌情報はなく、振り仮名も省略されているので、ここに改めて紹介し、併せて釈文を付す。

〔書誌〕

題 撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起

三三・五×四四二種 楮紙一枚刷

〔翻刻〕

*翻刻に際し、旧字は原本どおりとしたが、異体字は通行の字体に改めた。〔 〕は改行を示す。

撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺寶珠院略縁起／抑當院は弘法大師の開基にして人王五十二代 嵯峨天皇の御宇弘仁年中／高野山草創の頃平安城の東寺より南紀え通行し給ふ砌しばらく此地に安居し／如意宝珠の秘法を御修行あり悉地成就し給ふ靈場なれば則此地において／一字を建立して宝珠院と号す又菅原山天満宮寺といへる事は貞觀年中／人王五十六代 清和帝の頃右相 丞菅原道真公と当院四世惠澄僧正とは／無二の御中にて兄弟の添ちなみをも結ばせ給ひし御事故かゝる靈地たる／ことを奏して東西の天満郷を寺領と為し給ふ其後左遷の御時も立寄給ひ／離別の悲歎大方ならず則當寺の本尊に御意願をこめられ経巻を書写／して納給ひ泣々配所におもむかせ給ふ其後御直作の木像を筑紫よりおくり給ひける今鎮座し奉るは則此御木像なり五世惠岳上人夢中に神形を石上に現じて御顔／に唐ころも織らで北野の神ぞとは持たる梅のほひにもしれ 冀 は我に／大般若經の深理を聴受する事を得せしめられよ此事虚夢ならざる／證據を院内の松に遺せりとて飄然としてしりぞぎ給ふ惠岳夢さめて／庭前の松を見れば白練絹にてつゝめる物係れり謹でひらき拝するに／夢中感見の尊容なりしかば感涙肝に銘じ則其日より大般若經の法筵を開發し永世の業をはじめたり其後百一代／後小松院の御宇叡感の餘りに撰津國にて豊嶋郡大和國にて添下郡／此二郡を下

され菅原山天満宮寺と勅号の 御繪旨を給ふ應永三年／二月朔日の事なり當院の略多んぎかくのごとし

〔釈文〕

*句読点・鉤括弧・段落を施し、用字は通行の字体に改めた。また、内容に即して全体を五つのパートに分け、丸数字を付した。

撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺寶珠院略縁起

① 抑 当院は、弘法大師の開基にして、人王五十二代嵯峨天皇の御宇、弘仁年中、高野山草創の頃、平安城の東寺より南紀え通行し給ふ砌、しばらく此地に安居し、如意宝珠の秘法を御修行あり。悉地成就し給ふ靈場なれば、則此地において一字を建立して、宝珠院と号す。

② 又菅原山天満宮寺といへる事は、貞觀年中、人王五十六代清和帝の頃、右相 丞菅原道真公と当院四世惠澄僧正とは無二の御中にて、兄弟の添ちなみをも結ばせ給ひし御事故、かゝる靈地たることを奏して、東西の天満郷を寺領と為し給ふ。其後左遷の御時も、立寄給ひ、離別の悲歎大方ならず。則當寺の本尊に御意願をこめられ、経巻を書写して納給ひ、泣々配所におもむかせ給ふ。其後、御直作の木像を筑紫より

おくり給ひける（今鎮座し奉るは、則ち此の御木像なり）。

③五世恵岳上人、夢中に神形を石上に現じて、御顔に唐ころも織らで、北野の神ぞとは、持ちたる梅のほひにもしれ、

翼は我に大般若経の深理を聴受する事を得せしめられよ。此の事虚夢ならざる証拠を院内の松に遺せりとて、飄然としてしりぞき給ふ。恵岳夢さめて、庭前の松を見れば、白練絹にてつゝめる物係れり。謹んでひらき拝するに、夢中感見の尊容なりしかば、感涙肝に銘じ、則ち其の日より大般若経の法筵を開発し、永世の業をはじめたり。

④其後、百一代後小松院の御宇、叡感の余りに撰津国にて豊島郡、大和国にて添下郡、此の二郡を下され、菅原山天満宮寺と勅号の御綸旨を給ふ。応永三年二月朔日の事なり。

⑤当院の略えんぎ、かくのごとし。

①には空海による創建と院号の由来（如意宝珠の秘法）が記され、②は菅原道真との関わりと経卷・木像の由来、③は天神の夢告と大般若講の由来、④は寺領拝領の記事で、④を併せて山号寺号の由来の説明になっており、そして①④を指し、これが宝珠院の縁起であると⑤でまとめて簡にして要を得た略縁起であると言えよう。

新出縁起類

さて、この『撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起』以外にも、宝珠院には数点の縁起が所蔵されている。現在、木箱に仮番号を付しながら典籍文書類の調査を進めているが、縁起およびそれに類する資料は一括して別置しており、まだ番号は付けていない。それらのうち、本稿では『撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起』と類する本文を有する近世の略縁起六点を紹介する。仮に【縁1】～【縁6】という記号を付し、まずは書誌情報を示す。なお、【縁1】～【縁5】はいずれも本文共紙の仮綴で、最終丁にも文字が記されているため、裏見返・裏表紙に相当する紙も本文として丁数に含める。

【書誌】

- 【縁1】 外題 菅原山略縁起／内題 天満寺縁起
二四・二×一六・五糶 楮紙 仮綴二丁 宝曆二年
(一七五二)
- 【縁2】 外題 菅原山略縁起／内題 天満寺縁起
二七・五×一六・三糶 楮紙 仮綴四丁 宝曆二年
- 【縁3】 外題 天満宮縁起 菅原山 宝珠院／内題 なし
二四・七×一六・九糶 楮紙 仮綴三丁

【縁4】 外題Ⅱ天満宮略縁起／内題Ⅱなし

二三・八×一六・二種 楮紙 仮綴四丁

【縁5】 外題Ⅱ天満宮略縁起／内題Ⅱなし

二四・一×一六・三種 楮紙・鳥の子紙 仮綴二丁

※楮紙（表紙）・鳥の子紙（本文）

【縁6】 題Ⅱ菅原山天満宮寺略縁起

三三・九×四四・〇種 楮紙一枚刷

これらのほかにも、縁起の草案や、寺宝・大般若講の由来、歴代住持の行状記、寺格昇格願等、近世昭和の縁起周縁資料が確認できるが、それらについては、稿を改めて紹介したい。

「【翻刻】【縁1】『天満寺縁起』

法印亮賢

菅原山略縁起

天満寺縁起

「表紙

抑天満寺淳和皇帝馭宇天長二年草創也弘法大師

欲下攀躋南山而定留身於金剛峯寺上之時適游於浪華矣時一老翁語大師曰此江北野每朝紫雲纓韃

而輝光射日恐靈珠之埋者乎大師夙起行レ之

視則加翁之言因大師弟子賢惠法印沐齋而修

二明王如意寶印修中忽得佛舍利數顆於是誓

營寺於此地則不日而成矣始号曰如意珠院

次改寶珠院也貞觀之末年菅原右丞相道真卿

慕此地靈珠之出處而尚大師之遺址數來詣而

尊敬最厚矣然昌泰四年遭逢事而左遷

大宰府都督當此之時益傾信於大悲尊納預寫

之經卷又配所薨去之後延長年中入告於當寺中

興上人慧岳之夢裏曰我讒配之時非不動念是以

念怒无止息時子其為我轉讀般若而慰予愜

慮之斲上人愕然而起看於松樹梢有裏一小物

捉之披視之儼然渡唐之一小像也此樹号曰影向

松依茲不移時日集子弟而書寫般若妙典即轉

讀以為恒規爾以降住持代代奉事而加虔敬焉

後小松院御宇應永三年二月朔日上帝以權中納言

雅綱卿宣下於大和攝津兩國廬附若干田園

永令祈勅願此時改号菅原山天満宮寺者也蓋

為其境致兼對金城籠殿宇乾迎摩耶

映白雲東西五十步南北八十步徑松青梅鬱茂

厭梵宇黃鳥杜鵑應時和鳴寶殿佛樓尽丹

「1才

青^ツ淨厨浴室无^シ不^レ備^ハ矣佛樓之後^ハ有^ニ天満宮^一 〔2オ
 宝殿階^チ壘^ミ石^ヲ緑^ヲ楣^ヲ鏤^テレ玉^ヲ而壯麗不^レ可^ニ亦言^フ也
 延長之歳鎮^ニ座^ニ于此寺^ニ以降雖^モ有^ニ世之興廢^一数^シ
 有^中降殺^上未^タ絶^ニ祭典^ヲ既^ニ近^ニ千歳^ニ者也

寶曆二壬申之仲春以^テ天満宮神退八百五十年祭
 儀^ヲ欽^テ奉^ニ開扉^シ然^モ古^ク來^ニ之縁起雖^モ盡^ス其詳^ヲ
 以^テ其^ノ年^ノ歴^之久^ク為^ニ紙蟬^ノ所^ラ損^セ故^ニ採^ニ舊^一
 記^ノ遺^文代^テ現^住亮賢法印^ニ揮^ニ筆^於西阜之
 天宮^ニ云

豊山英叟拝稿

〔2ウ

【縁2】『天満寺縁起』も、筆は異なるがほぼ同文である。
 1ウ2行目や2オ6行目のミセケチ傍記による修正が本行に
 反映されていたり、1ウ6行目冒頭「忿怒」という明らかな
 誤りを「忿怒」としていたりするところから、【縁1】を清
 書したものとも考えられるが、逆に【縁1】で正しく表記さ
 れている1オ6行目「弟子賢恵法師」が脱落し、傍記してい
 たりもし、先後関係は確定できない。いずれにしても、両縁
 起とも草稿の域を出るものではない。

表紙に名が見える「亮賢」は、宝珠院中興第十代住持で、

宝曆四年（一七五四）八月三日に没していることが、墓碑や
 行状記から確認できる。この亮賢に代わり、「西阜之天宮」
 に揮筆したという「豊山英叟」については不明。他日を期し
 たい。宝曆二年（一七五二）に執り行われた「天満宮神退
 八百五十年ノ祭儀」とは、延喜三年（九〇三）に没した菅原
 道真の八百五十回忌に合わせた祭典であろう。この時に「開
 扉」したのは、慧岳が夢中に感得した「渡唐之一小像」、即
 ち天神像と判断できよう。なお、田中方男「大阪天満宮と宝
 珠院との関係―古文書に現れた謎の宝珠院―」（『大阪春秋』
 四九、一九八七）によると、この年に宝珠院が新設した宝殿
 をめぐり大坂天満宮との関係が悪化し、訴訟にまで発展した
 という。しかし、それ以前は天満宮との関係は密接で、宝珠
 院は天満宮の神宮寺であったと推測する。

内容は、『摂州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁
 起』の①④に加えて境内の描写がある。また、例えば①で
 創建年を天長二年としたり、「如意宝珠の秘法」を「二明王
 如意宝印」と三尊合行法を思わせる表現にしたりと、情報量
 が増加している。ただ、既存の縁起を増補することも抄出す
 ることもありうるので、先後関係は不明とせざるを得ない。
 識語を文面通り解釈すれば、これに先立つ「古来之縁起」
 （＝本縁起）が存在したということであり、それを基に記し

たのが【縁1】【縁2】の『天満寺縁起』であるということになるが、この種の表現は縁起の常套句なので、即断は控えない。

「翻刻」【縁3】『天満宮縁起』

菅原山

天満宮縁起

宝珠院

菅原山天満寺宝珠院地は弘法大師の開基

人王五十三代淳和帝の御宇天長年中高野

山開社のはしめ平安城の東寺より高野山へ

往来し給ふ砌り弥勒三會の暁を期し入定留

身の壇場をひらき経営成就の御為しばらく

此地に安居御弟子聖法師をして如意宝珠の秘法を御修行

有り悉地成就し給ふ霊場なれば則一字

を建立して宝珠院地と号す貞観年中

菅相公大師遺跡をしたわせられ朝勤

のいとまに此地に來詣ししんのかたむけ厚く

崇敬し給ふ左遷の御時にも當寺の本尊

「表紙

「1オ

に意願をこめ書写の経巻を納めたもふ
配所こきよ薨去の後當寺二代の住僧そ惠岳上人の
夢中に告ていわく當寺は□生涯せうがいきんぼ欽慕の勝地
なり願くは般若の法味をたむけに誦誦
の晨あしたには庭上の松に來現して大空の
深理授受し講經の冬には提樹しゅう下の地池に
影向して真如の法水に洗濯せんたくせん若疑慮を
懐くは庭上の松下を見るに我神遊渡唐の
形を遺さんあやしむ事なかれと岳師愕
然として驚き見れば不思議かな此神
形を感得せり一山の僧徒不日に大般若經を
書写して常恒不断的誦經を開發せり
後小松院の御宇應永三年二月朔日撰津
大和両國において二郡の莊園をあて行れ
永代勅願の宣下則權中納言雅綱卿の執達
菅原山天満寺と寄附状に詳なり神退より
今年八百五十年に当る秘し奉る神形なり
といへとも神威を増さんかため開帳
し奉る者也

「2オ

「2ウ

「3オ

外題に「天満宮縁起」とあるが、書き出しは「菅原山天満

寺宝珠院」とあり、内容も天満宮ではなく宝珠院の縁起である。【縁1】【縁2】と同様、道真没後八百五十年、即ち宝暦二年に「神形」を開帳した際に記されたものであるが、こちらのほうがやや簡略な内容となっている。

「翻刻」【縁4】『天満宮略縁起』

「 天満宮略縁起

抑菅原山天満宮寺宝珠院と申は

人皇五拾式代嵯峨皇帝之御宇弘

法大師の開基也時に大師の御弟子

堅恵法師此地にをひて如意宝珠の

秘法を修行したまふに悉地成就し

たまふり依て院号を宝珠院と名付

たまふなり然に貞観年中菅相公此

霊場をしたわせたまひ朝勤のいと

まに参詣まし〜たまふ事具に

本縁起にあり其後筑紫に左遷の

御時にも立寄りたまひあまたの経巻

を書寫し納めたまふ又神去の後當

院式代目の住僧恵岳法師の夢中に

「 表紙

「 1オ

「 1ウ

告てのたまわく衲僧願くは子が為

に大般若經の法筵を開常時に

松樹に影向して法味をうけん此事信

ぜすんは吾か形像を遺してなかく

納受の證とせんと岳師告のごとく

樹上をみるに儼然たる神像を得

たまへり一山の僧徒奇いの思をなし

大般若經六百軸を不日に書寫して

常恒不斷の讀誦を開発せりこの趣

天耳に達し後小松院の御宇應永

三年二月朔日あまたの寺領を寄

附したまひ菅原山天満宮寺と

勅号ある然るに今年九百御年回

に依て秘し奉る所の御神像を開

帳し奉る者なりかゝる不思議の

霊縁なれば信心の輩はちかふ依て

御拝のあらましなう

「 2オ

「 2ウ

「 3オ

「 3ウ

これも、外題に「天満宮略縁起」とするが、宝珠院の縁起である。書き出で「天満寺」ではなく「天満宮寺」として

いることには注意したい。大坂天満宮の神宮寺であったことを

意識した表現である。そして末尾にあるように、道真の九百回忌に合わせた開帳であることから、享和二年（一八〇二）に記されたものと判断できよう。【縁5】もほぼ同文である。

【翻刻】【縁6】『菅原山天満宮寺略縁起』

菅原山天満宮寺略縁起

抑當寺は弘法大師十大御弟子の随一室生山堅恵大徳此地にて如意宝珠の法を修し給ひ其法忽に成就ありしかば靈地なりとて一字を建て宝珠院と号給ふ又菅原山天満宮寺と謂事は菅丞相斯る靈地なるを清和帝に奏して東西の天満郷を寺領に寄せ給ひ筑紫に神退の後に開山の法孫恵暁阿遮梨夢中に神形を現して御哥に唐衣織りて北野の神そとは持たる梅の匂ひにもしれ冀は我に大般若經の深理を聴受する事を得せしめられよ此事虚夢ならざる證據を院内の松に遺せりとて飄然として退給ふ恵暁夢覚て早く起松を見上れば白練絹にて包めるやうなる物松か枝に係れり謹て披き拝するに夢中感見の尊容なりしかば感涙肝に銘じ則其日より大般若經の法筵を開發し永世の業を創めり

その後 後小松院の御宇叡感の余り撰津國にて豊嶋郡大和國にて添下郡此二郡の莊園を下され菅原山天満宮寺と勅号

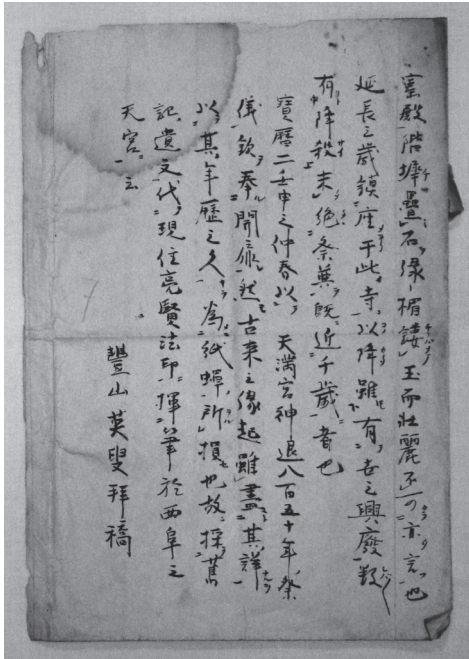
の御繪旨を賜ふ于時應永三年二月朔日之事

眉目山寺院縁起略して

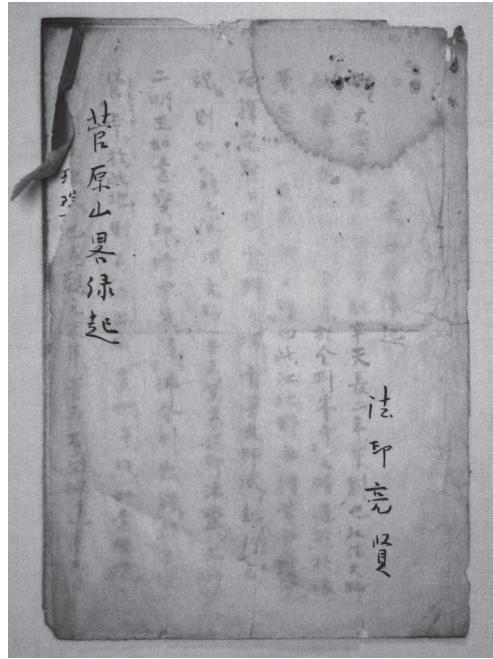
これも「天満宮寺」とする。『撰州西成郡大坂天満菅原山天満宮寺宝珠院略縁起』と同様に木版一枚刷であるが、本文は異なる。印面状態が悪く、特に末尾は読みにくい。

以上、六点四種の新出縁起を紹介し、簡略な解説を加えるにとどめた。【縁1】と【縁2】、【縁4】と【縁5】の校異や、縁起同士の詳細な比較も必要であり、また、既存資料を参照した上での分析等も十分とは言えないが、今後の調査で関連資料が出現する可能性が高いゆえ、それを待つてから、改めて詳細な考察を加えたいと考えている。まずはここに宝珠院縁起の生成と展開、そしてその背後にある信仰の様相を考察する際の基礎資料を提示することにより、諸賢の批正を仰ぎたい。

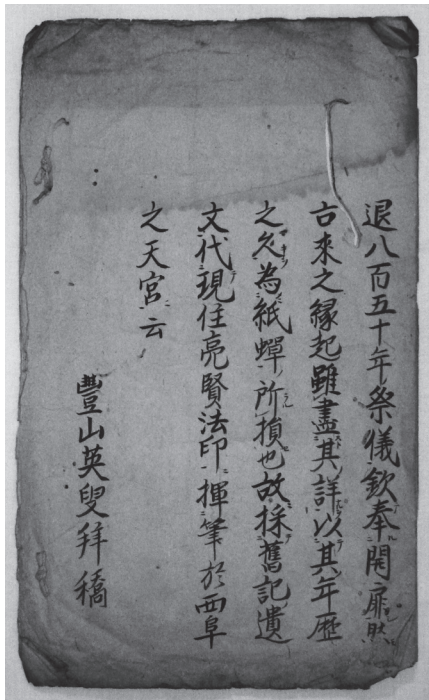
「付記」本稿は、平成二十五年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・挑戦的萌芽研究「宝珠院所蔵資料の基礎的研究」による研究成果の一部である。



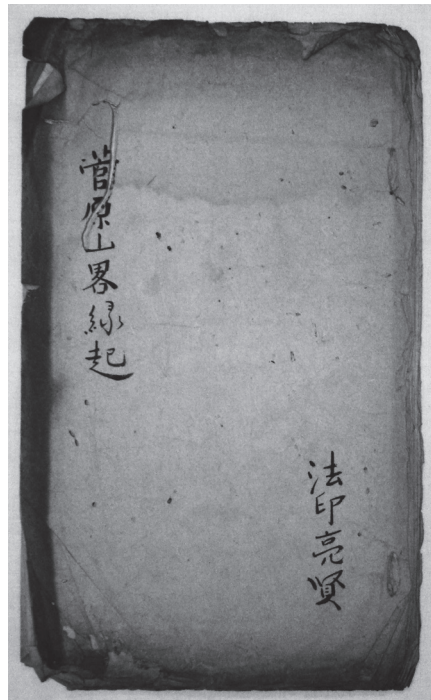
【縁1】 末尾



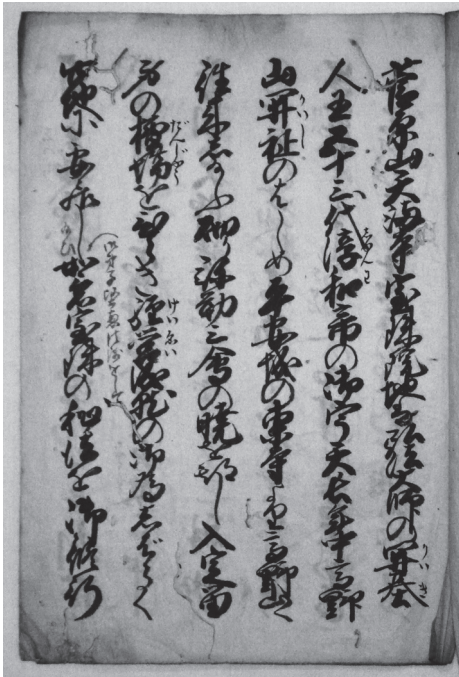
【縁1】 表紙



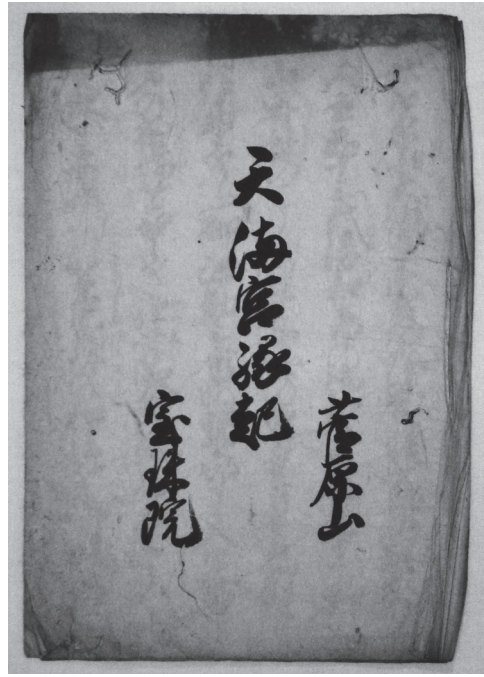
【縁2】 末尾



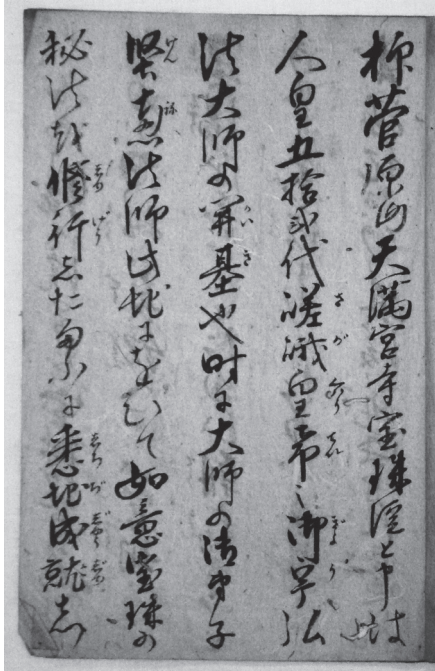
【縁2】 表紙



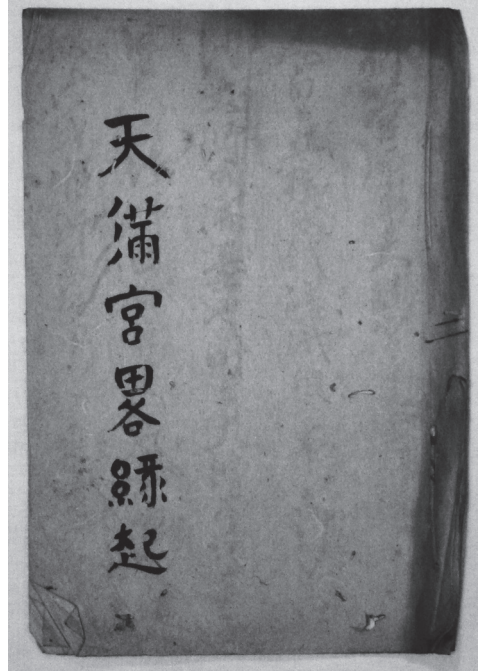
【縁3】冒頭



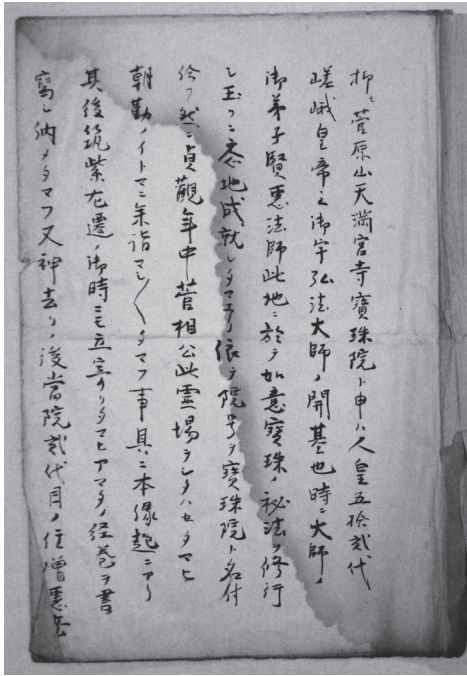
【縁3】表紙



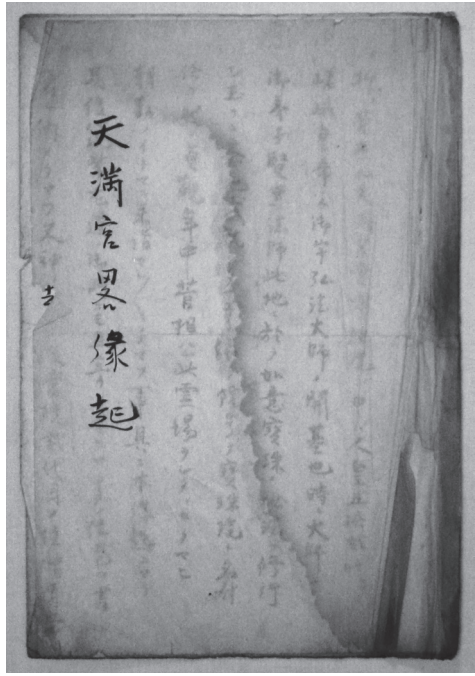
【縁4】冒頭



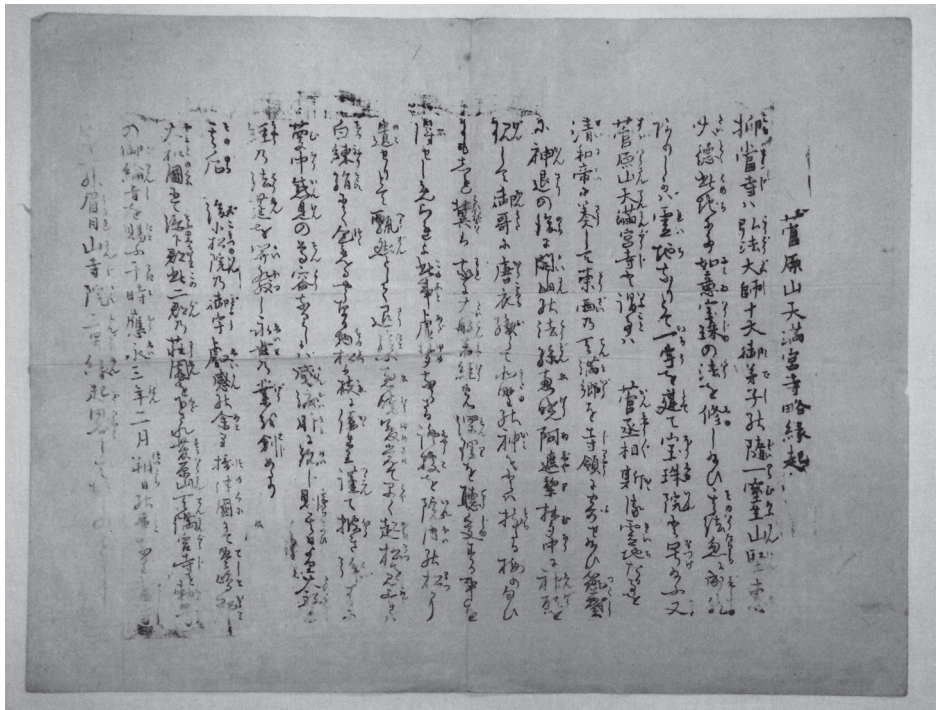
【縁4】表紙



【縁5】冒頭



【縁5】表紙



【縁6】